テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ(PATCH2.3)　クロニクルクエスト

シルクスの塔

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

シルクスの塔

ラムブルース ： ああ、君か……　クリスタルタワーの調査状況の確認に？
そうか……。残念だが、まだ良い報告はないんだ。無駄足を踏ませてすまない。
前回の調査で突破した「古代の民の迷宮」については、その後も調査が進んでいるのだがね。
さらに先……「シルクスの塔」への侵入方法が、さっぱりだ。

グ・ラハ・ティア ： ほら、クリスタルタワーの前に、侵入者を殲滅する「八剣士の前庭」があったろ？
構造は違うが、シルクスの塔の入口も、防衛機構で固められてるのさ。
しかも、すげーやっかいなヤツ！　オレとシドであれこれ試しちゃいるが、何の成果もでやしねー。

ラムブルース ： ……頼みますよ、本当に。
ともかく、万策尽きていてね……。君の手を借りようにも、突破の糸口さえ掴めていない状況だ。
時間はかかるが、古代の記録を洗っていくしか……。

？？？？ ： ならば、その防衛機構……　僕らに見せてくれないか。

グ・ラハ・ティア ： ……なんだぁ？

？？？？ ： にらまないでよ、賢人さん。私たちは、あんたたちの……ノアの味方なんだからね。
ウネ ： 私はウネ、隣の暗そうなのがドーガ。古代アラグ文明の研究を専門にしてるんだ。
バルデシオン委員会の命で、調査を手伝いにきたよ。

ラムブルース ： ウネにドーガ……？　いまどき珍しい、古風な名だな。
しかし、君たち。委員会からは、その名どころか、協力者を送るという連絡さえ受けていないが？

ドーガ ： ……では、連絡が行き違ったのだろう。信じてもらうしかない。

ラムブルース ： グ・ラハ・ティア？　どうしました？

グ・ラハ・ティア ： ……なんか……眼が……。でも、大丈夫だ……気にするほどじゃない。

ウネ ： ……驚いた。よく見たらその右眼、私たちと同じ眼だね。

グ・ラハ・ティア ： 同じ眼……？　まさか、あんたたちも「紅血の魔眼」の持ち主なのか！？
この眼について、知ってることがあるなら教えてくれ！　血のように紅い魔眼は、失われたはずのアラグ人の特徴のはず……
なのにオレは、親父からこの眼を受け継いだんだ。
親父も祖父から……　でも、兄弟の中で眼が顕れるのは、きまってひとりだけだ。
その意味を、オレはずっと探してきた……！

ドーガ ： ……すまないが、僕らではその答えを示せない。確かなのは、この眼とアラグには因縁があるということのみ。
そして、お前がその因縁に導かれてきたように、僕らも己の存在理由を果たしにきた……。
これでもまだ、信じるに足らないだろうか。

グ・ラハ・ティア ： ……なあ、調査に加えてやろうぜ。拒んだとして、ほかに有力なあてもねーだろ？

ラムブルース ： ふむ……。あなたの決定であれば、拒みはしませんが……。
君たちの存在については、後ほど、委員会に確認をとらせてもらう。それで構わないな？
よろしい、ウネとドーガを相談役としてノアに迎えよう。ふたりに防衛機構を見せ、意見を聞こうじゃないか。

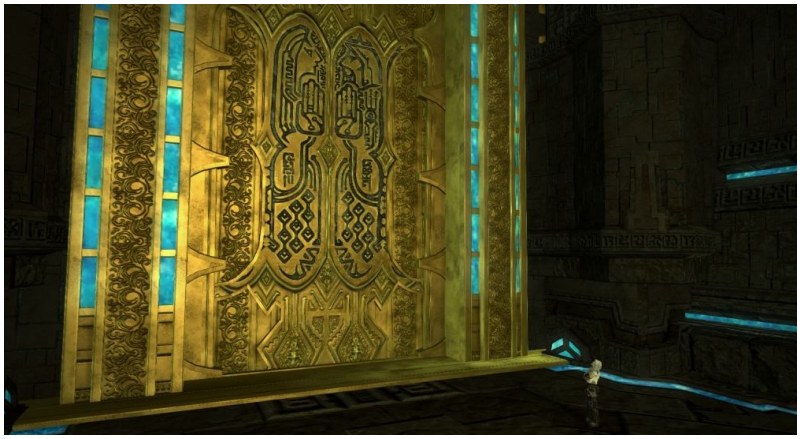
ドーガ ： ありがたい……。きっと、役に立てるだろう。

ラムブルース ： ◆◆◆、君も彼らとともに、シルクスの塔の入口へ向かってほしい。現地のシドから、防衛機構について聞いてくれ。
シルクスの塔へは、八剣士の前庭で調査をしている「ビッグス」たちに声をかければ、案内してもらえるだろう。
……よろしく頼むぞ。

グ・ラハ・ティア ： オレも行くぜ！　あんたとこいつらがいたら、なんだか歴史が動きそうだからな！

ウェッジ ： シルクスの塔の入口を、どうにかして、こじ開けたいッス。そのために、ここで防衛機構の仕組みを調べてるッス！

ビッグス ： おっ、◆◆◆じゃないか！　今日はどうしたってんだ？　シルクスの塔の調査開始には、まだ早すぎるぞ。
……ほう、バルデシオン委員会からの新しい仲間か！　そりゃありがたい。
親方も、ずっと難しい顔で悩んでるからなぁ。
シルクスの塔の入口は、古代の民の迷宮の先だ。さっそく案内してやるよ。



シド ： 誰かと思えば、お前たちか。……そっちの、見慣れないふたりは？

グ・ラハ・ティア ： お待ちかねの朗報だぜ、シド。バルデシオン委員会が専門家をよこしてくれたんだ。ウネに、ドーガだとよ。

ドーガ ： 防衛機構に手こずっていると聞き、様子を見にきた。これから、よろしく頼む。

シド ： ああ、よろしく。……すごいな、格好までアラグ様式か。専門家ってのも伊達じゃなさそうだ。
この先が、クリスタルタワーの中枢……　「シルクスの塔」と呼ばれる区画だ。
だが、ご覧のとおり、唯一の入口は巨大な扉で塞がれている。この扉こそ、俺たちを悩ませている防衛機構さ。
扉は、八剣士の前庭と違って、攻撃してくることはない。けれども開く方法がわからない上に、
いかなる手段を使っても壊せなかった。
つまり「開かずの扉」ってヤツさ……。単純だが、最も効果的な防衛機構というわけだ。

グ・ラハ・ティア ： 手がかりになりそうなのが、扉の中央に描かれた意匠だ。恐らくこれは、対となった男女……　しかも相当に身分が高い。
……それ以上は、はっきりしねーがな。意味があるのやら、ないのやら……。

シド ： おい、言ったろ、開こうとしても無駄だ。人のカごときじゃ、その扉はびくともしない。

ウネ ： ああ、聞いていたよ。まさかこの、か弱い乙女の細腕で、扉を開こうなんて思っちゃいないさ。

ドーガ ： そう、僕らが開くのではない。……扉の方が、おのずと開くんだ。

グ・ラハ・ティア ： なッ……嘘だろ……！？　扉が開いたッ……！

シド ： いったい、何をしたんだ……！　人が近づくだけで扉が開くなんて、考えられない。お前たち……本当に、ただの研究者か……？

？？？？ ： 『光束ねし　天突く塔は　金色の扉の先に黙さん……』
『其は厳然たる　隔絶の壁　いと尊き始祖の血にのみ　至天の道が開かれん』……記録のとおりだな。

ネロ ： よぉ、寄せ集めの調査団。ずいぶんと珍しい「玩具」を手に入れたようだな？

シド ： お前は……ネロ……！？　やはり、魔導城から逃げ延びていたか……！

ネロ ： おいおい、ガーロンドォ……。かつての級友の生還を、もう少し喜んでくれてもいいんだぜ？
そう警戒しなくても、今のオレは哀れな敗残兵だ。おめおめ本国に帰って処刑されてやるのもシャクだから、
放浪の旅を楽しんでるだけよ。
そんなとき、お前らの噂を聞いてな。面白そうなンで、混ざりにきたわけだ。

シド ： ……信じられるか。

ネロ ： まあ、オレの話なんざ、どうだっていいだろう。問題は、そいつらの正体だ……。オレにはその心当たりがある。
知ってのとおり、クリスタルタワーは、アラグ帝国に繁栄をもたらした最重要施設。
中枢に立ち入れたのは、皇族と一部の重鎮だけだったという。
さらに、オレが探し当てた記録の一節によると、扉を開くことができたのは「尊き始祖の血」のみ。つまり鍵は……皇帝の血族だ。

グ・ラハ・ティア ： まさか、こいつらがアラグ皇帝の子孫だってのか！？　馬鹿いえ、数千年前の話だぞ！

ネロ ： 子孫、か……。そんな血の通ったもンじゃないだろ、なぁ？
あえていうなら、模造品……。古代アラグ文明が誇った魔科学のたまものにして、複製された「生きている鍵」さ。
お前らの正体は、クリスタルタワーに保管されていた、人造の生命体……「クローン」だ。

ドーガ ： ……そこまで知られているなら、もはや否定のしようもないか。
すまない、隠し通すつもりはなかった。この扉を開けてからでなければ、真実を受け入れてもらえないと思ったんだ。

ウネ ： 一度、外に出ないかい？　そこで改めて、あんたたちに話したいことがある。

グ・ラハ・ティア ： ……ああ、わかった。

シド ： おい、まさか本当についてくるつもりか……？

ネロ ： そういっただろ？　それともなんだ、仲良くしたければ、手土産のひとつでも持参しろってか？
オレが話した情報が記録されてる、アラガントームストーンだ。帝国軍第XIV軍団が、後生大事に抱えてたもンでな。
お前にやるよ。せいぜいよろしくな、ガーロンド……　いや、シドよぉ？

ウネ ： 私たちのことを疑うのは当然だ。でも、どうか話を聞いてほしいんだよ。……これは、私たちが待ち望み続けた機会なのさ。

ドーガ ： ……戻ったか。では、僕らにまつわる真実を話そう。
お前たちの調査にも関わる、重大な話だ。ラムブルースも呼ばなければ……。
まずは、此度の非礼を詫びたい。騙すような真似をして、すまなかった。
僕らは、バルデシオン委員会に派遣された研究者ではない。推測のとおり、アラグ帝国時代に造られた人造生命体……
「クローン」だ。

ラムブルース ： 人造生命体……クローン……。……にわかには信じがたい話だな。
そもそも、なぜクローンなどというものが存在している？　君たちの目的は何だ？

ドーガ ： 順を追って話そう。それに答えるには、アラグ帝国の真の歴史を紐解く必要がある。

ウネ ： アラグ帝国が繁栄を極めていたのは、私たちが生み出されるよりも、ずっと前……。
その頃は、クリスタルタワーも開かれた施設でね。そこで生み出される無限のエネルギーによって、国は渇きを知らなかったのさ。

ドーガ ： しかし、飽和した繁栄の中で、民は次第に退廃的になっていった。……その気運に拍車をかけたのが、皇族の衰退だ。
民の活力が失われ、それを束ねる皇族の血も弱まれば、当然のごとく国は傾く……。
隆盛を誇ったアラグ帝国も、その流れは止められなかった。

ウネ ： ……そんなとき、帝国再建のために立ち上がったのが、稀代の科学者「アモン」という男だったんだよ。
傾いた国には、傑出した指導者が必要……　そう考えたアモンは、魔科学で建国の祖を蘇らせようと試みた。

グ・ラハ・ティア ： 建国の祖……？　まさか、伝説の始皇帝「ザンデ」か……！

ウネ ： そう、そのための研究の一環で造られたのが、ザンデ直系の子孫である「ウネ」と「ドーガ」のクローン……　つまり、私たちってわけさ。

ラムブルース ： 超文明の成せる技か……。事実、アラグ史には、皇帝ザンデの名が二度登場している。
私たちは、別の皇帝が名を継いだものと考えていたが……　実際は、ザンデ本人が玉座に戻ったというのか？

ウネ ： ああ、ザンデは復活したよ。人の命という、絶対のことわりを凌駕してね。

ドーガ ： 蘇ったザンデは瞬く間に帝国を再建し、在りし日の野望……世界統一に乗り出した。
統一戦争には、大きな力が必要だ。クリスタルタワーは閉ざされて、多くのエネルギーが、
恐るべき「闇の力」を得るための研究に費やされた……。

シド ： 大昔の歴史についてはわかった。あの扉を開いたお前たちの言葉だ、疑うつもりもない。
だが、それが今の状況と、どう関係ある？　俺たちが知りたいのは、古代の産物であるお前たちや
クリスタルタワーが、この時代に現れた理由だ。

ドーガ ： ……ザンデの野望は、過ぎた歴史の話ではない。
ザンデは今でも生きているんだ。あの、シルクスの塔の中で……。
「闇の力」を御すには、莫大なエネルギーが必要となる。ザンデは、衛星「ダラガブ」を打ち上げ、
クリスタルタワーに太陽の力を集めようとした……。
だが、わずかな誤算が惨事を引き起こす。エネルギーを受け止めきれず、地殻が崩壊したんだ。
想像を絶する大地震が起きた……。後世に「第四霊災」と呼ばれたその災害は、アラグ帝国に終焉をもたらした。
しかし、崩壊の最中……　ザンデの腹心となっていた科学者アモンは、地中に沈みゆくクリスタルタワーの時間を止めたんだ。
中にいたザンデもろとも、クリスタルタワーは眠りについた。再びの目覚めを……野望の実現を待つために……。

ウネ ： 時は流れ、あんたたちの時代がくる。対となるダラガブに呼応して目覚めたクリスタルタワーは、第七霊災を経て、再び地上に露出した。
……それはすなわち、ザンデの目覚めでもある。
ザンデは力を求めるあまり、「闇の力」に近づきすぎた。守るべき民や領土を持たずとも、野望に焦がれて進むだろう。
……世界統一に向けてね。
私たちは、ザンデを止めたい。それが、オリジナルのウネとドーガから託された使命なんだ。
彼らは、ザンデの凶行を……世界を案じていた。だから、クローンのひとつにすぎなかった私たちに、戦うための心をくれた。

ドーガ ： だが、この使命は、僕らだけでは成しえない。クリスタルタワーとともに目覚めた僕らは、ずっと待ち続けていたんだ。
古代の民の迷宮を乗り越えて、ザンデの闇を振り払う「光の戦士」がやってくるのを……！

シド ： ……俺たちの調査は、ずっと見られてたってわけだ。なるほど、委員会の存在を知ってたのにも、納得だぜ。
さて……どうする、◇◇◇？　今のうちにザンデとやらを倒さなければ、調査どころか、世界の危機らしいが？

ドーガ ： 力を貸してくれるんだな。ありがたい……　ともに、アラグの闇の歴史を終わらせよう。

ラムブルース ： 我々はクリスタルタワーの調査を続けてきた。だが、聞いてのとおり、その危険性は明らかだ。
シドも、我々聖コイナク財団も、遺産が悲劇を起こすことを望んではいない。ゆえにノアの使命を、調査から「封印」へと移行する。
これより、クリスタルタワーの中枢、「シルクスの塔」へ突入し、封印を試みるぞ！
先鋒は、◆◆◆率いる冒険者部隊だ。防衛機構と始皇帝ザンデを突破し、塔内の脅威を排除してほしい。
その他の人員は、冒険者部隊の任務完了に備え、クリスタルタワー封印の準備をすすめてくれ！

グ・ラハ・ティア ： な、なあ……。あんたたちの眼と、オレの眼が同じなら、オレもクローンってことなのかな……。

ドーガ ： その眼は、親から継いだといったな。……僕ら人造生命体は、子を残すことができない。だから、クローンの血族という線はないだろう。
お前はその眼を「紅血の魔眼」と呼んだが、僕らは「皇血の魔眼」と呼んでいた。
アラグ人の中でも、皇族に近しい者のみが有した特徴だ。
それを不自然に継承してきたとあれば、確かに、何か意味のあることなのだろう……。
そこにきっと、お前の運命が待っている。

ドーガ ： シルクスの塔の中には、おそらく僕らと同じ姿をした、クローンがいる……。だが、その姿に惑わされてはいけない。
彼らは、自我を持たぬ傀儡にすぎないのだ。「クリスタルタワーを守れ」という命令を遂行するために、
侵入者たる君たちに襲い掛かってくるだろう。
本来、自分と「同じもの」である存在が倒されるのは、もちろん好ましい光景ではない……。それでも、情け容赦は無用だ。

ウネ ： 歴史にこそ残っていないだろうけれど、私たちの元となったアラグの皇族……
オリジナルのウネとドーガは、それは聡明な方々だった。
復活したザンデに王座を譲りながらも、「闇の力」で繁栄していく帝国の未来を案じ、私たちに、知恵と心をわけてくださったんだ。
あの方々だったら、あるいは……　数千年先に、あんたのような「光の戦士」が現れることも、
見抜いてらっしゃったのかもしれないね。

グ・ラハ・ティア ： ん？　大丈夫かって？　……わるいな、余計な心配かけちまって。考えても仕方ねーし、今は気にしないでおくさ！
それよりも、「シルクスの塔」への突入だ！
あんたがザンデをぶっとばして、オレたちでクリスタルタワーを封印するんだ。気ぃ引き締めて、頼むぜ！

妖艶のスキュラ ： グルルルルル……犬が……　犬どもが求めておるぞ、貴様らの肉を！
吠えろ犬どもー！　無礼な輩を燃やしつくせエエエ！
おぞましい……妾の姿を、そう思ったな？　許さぬ、許さぬ、許さぬぞオオオ！
おのれ、おのれ、おのれエエエ！　貴様らも、妾をあざ笑うのかアアア！
あぁ……犬どもの声が……消えてゆく……　これで、ようやく……眠れ……。

不壊のガーディアン ： 我は帝国の守護者。これより先、一歩たりとも進ませんぞ！
支援機構始動……　エネルギー充填開始！
陛下に仇なす愚民どもー！　その愚かさを身を以て思い知れ！
防御装置起動！　不壊たるゆえんを見せてくれる！
充填率100%……　消えよ、陛下に仇なす愚民どもー！
み、見事なり……　我が守りを、打ち崩すとは……。

異才のアモン ： おやおや、随分と無粋な客ですネ……　せめて、華々しくお散りなサイ！
もう余興は十分でショウ……　そろそろ、幕引きとさせていただきますヨ！
ま、まさか、このワタシが……　陛下……ご奴らは、危険……ですゾ……。

人風情がよくここまで来たな　だが手遅れだ……闇はもう　そこまで来ている
私は世界を完全なる闇で覆いつくす……　ファファファ……死ねい！！

始皇帝ザンデ ： カを……闇の力を感じるぞ……　さあ、星すら統べる我が魔力を見よ！
ファファファ……我が覇道を阻まんとする者よ。暗き星に、押しつぶされるがいい！
グフッ……私を倒しても……無駄だ……　全ては、闇に……包まれるのだ……。

グ・ラハ・ティア ： おーい、◇◇◇！
始皇帝ザンデを倒したんだな！　すげーよ、あんたやっぱりタダモノじゃねー！

ドーガ ： ああ、本当に……。アラグの技術が失われても、人の強さは、失われていなかったようだ。
これで、ザンデが遺した禍根を断てる。お前は、僕らが何千年も待ち続けた、悲願の英雄だ……！

シド ： ……その鐙。今さら引っぱりだしてきて、何を企んでいる？

ネロ ： 念のため、塔内の危険に備えただけだ。お前たちに壊された鐙でも、着ないよりはマシだからな。……もっとオレを信じろよ、シド。
ま、オレのことは気にすんな。早いとこ、クリスタルタワーを封印するがいいさ。

ウネ ： それじゃあ、やることをやってしまおうかね。……封印といっても、方法はいろいろあるんだ。
クリスタルタワーを外界から封鎖するのか、あるいは動力を落とすのか……そのあたりは任せるよ。いずれにせよ、私たちの出番が先だ。

グ・ラハ・ティア ： 何をするんだ……？　その黒い歪みに、何かあるのか？

ウネ ： ……ザンデは、「闇の力」を求めたといっただろう？　「闇の力」というのはね、この世界に隣接している異界……
「ヴォイド」から引き出されるんだ。
私たちの時代、そこは「闇の世界」と呼ばれていた。ザンデが世界統一のために得ようとしたのは、
闇の世界の勢力……妖異の軍勢だったのさ。

ドーガ ： 妖異は、餌であるエーテルが豊富な、この世界を狙っている。そこでザンデは、彼らと血の契約を交わした。
こちらと異界をつなげる「門」を開くかわりに、皇帝の血脈に従い、力と繁栄をもたらせ……とな。
その契約は、今でも続いている。だが、クローンであれ皇族の血をひく僕らなら、契約を破棄できるだろう。
この場所に生じている世界の裂け目から、闇の世界に、僕らの血を刻むんだ。そうすることで、ザンデの野望を終わらせられる。
さあ、ウネ……。

ウネ ： わかってるよ、ドーガ。やっと……私たちの役目を果たせるね……。

ネロ ： ククク……クククククク……　ハハハハハハッ！
そうだよなぁ、そうこなくちゃなぁッ！　本当にこのまま終わるのかと、内心ヒヤヒヤしたぜ？
オレがクリスタルタワー上部に観測した反応は、あの「アルテマウェポン」以上のものだった。
そう、始皇帝なんて、ちゃちなもンじゃあないッ！

シド ： 何だとッ……！？

？？？？ ： 古き契約……決して破らせはせんぞ……。

ザンデ ： メラシディアを平定した今、我が軍に敗北はなし……。「闇の力」も加われば、統一は遠からず現実となろう。
しかし……。望むものを得るほどに、死の記憶がよぎる……。かつて私に訪れた死は、一切の無であった。
幾度うつつに蘇ろうとも、先にはただ、死あるのみ。「人の命」という枷からは、逃れられぬ宿命か……。
人造の命よ……意志なき魂よ……。貴様らにはわかるまい。私の怒りも、倦怠も……この、底知れぬ恐怖さえ。
いずれ無となる命に、富や名声など不要。世界のすべてを無に還す……　それこそが、唯一絶対の覇道といえよう。
……力を集め、さらなる門を開くのだ。さすれば「暗闇の雲」が満ち、この世界を覆うであろう。
雲は、この世のすべてを食らう。わずかな希望すら残さずに、世界を原初の無に還すのだ。我が命と……同じように……。

グ・ラハ・ティア ： どうしたんだよ、あんたらしくもない！
くそッ、キリがねー！　いったい何が起きて……
くッ！？　なん、で……！　また……眼がッ……！

シド ： おい、ネロ！　これもお前の予想どおりか！？

ネロ ： 馬鹿いえ！　たかだかクローンと戯れるために、お前たちと、お仲間ごっこまでするもンかよ！
……何かが、こいつらを動かしてやがる。恐らくは妖異だ……それも最上位のな……。やはり、あの反応の正体は……！

ウネ ： ああ、ドーガッ！

ネロ ： チッ……！　あいつらを持ってかれたら、「闇の力」を御せなくなる！
ザンデが契約を交わした、究極の力……　手に入れるのは、このオレだ！

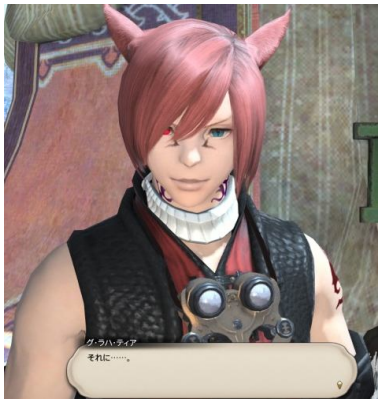
シド ： ネロッ！！

？？？？ ： すべてを闇に包み……　そして、光も闇も無に還す……。
暗闇の雲 ： 私は、暗闇の雲……。契約はいずれ、必ず果たそうぞ……。

シド ： くそ、ネロの奴まで……。駄目だ……ゲートが閉じちまった。
これじゃあ、追いかけようにも方法がない……。一度、調査地に戻って、ラムブルースに協力を要請しよう。

グ・ラハ・ティア ： ……悪い、なんだか頭まではっきりしねー。何かすごく大事なことを、思い出さなきゃいけないような……。

ラムブルース ： なんと……。シルクスの塔で、そんなことが……。
……しかし、わかってきたぞ。玉座の前に出現したのは、恐らく、この世界と異界をつなぐ門「ヴォイドゲート」だ。
妖異をこちらの世界に招きいれる場合、高位の妖異であるほど、大規模なヴォイドゲートを要するという……。
ザンデは、クリスタルタワーの生み出す力を使って、超巨大なヴォイドゲートを開こうとしたのだろう。
……その「暗闇の雲」という妖異のために。
幸い、今回はゲートが開ききらなかったようだが……。暗闇の雲……それほどの妖異ということか……。



シド ： 敵が何であれ、あいつらを拐われたままにはしておけない。どうにか助ける方法はないのか！？

ラムブルース ： 残念だが……　異界ヴォイドには、踏み込むことができない。
妖異召喚の例はいくつでもあるが、その逆となると、成功例を聞いたことがない。拐われた3人が、生きているのかさえ……。

シド ： くそ……。諦めるしかないのか……？

グ・ラハ・ティア ： ……それでもオレは、ウネとドーガを助けたい。
同じ眼だから同情してるわけじゃねー。ただ、あいつらが数千年前から大事に抱えてた使命を、果たさせてやりたいんだ。
それに……。
……このままじゃ駄目だ。どうしても、そんな気がする……。
契約が破棄されなければ、暗闇の雲は、いずれこの世界に現れる……。世界に闇が氾濫する……その前に……止めないと……。

ラムブルース ： ……グ・ラハ・ティア。ドーガたちに会ってから、あなたは様子がおかしい。その眼、やはり何かあるのでは……？

グ・ラハ・ティア ： わからねー。……ただ、どうしても……　何かを思い出さなきゃならない気がするんだ……。
眼の秘密はアラグにある……歴史から眼を離すな……　それが、親父から受け継いだ言葉だ。でも、今は……まだ……。

シド ： 俺からも頼む。あいつらを助け出す方法を模索してみないか？
ウネとドーガはもちろんだが……　俺の旧友は、放っておくとタチが悪いんでな。連れ戻して、釘を刺しておく必要がある。

ラムブルース ： ほんの一時のこととはいえ、彼らは我々の優秀な仲間だった。私とて、失いたくない気持ちはある……。
……わかった。専門家をあたって、何か手が打てないか考えよう。
ただし、相手は闇の世界……。すぐにとはいかないだろうから、しばし時間がほしい。
◆◆◆、協力に感謝する。君はしばし、休息をとってくれ。方法を見つけ次第、また力を借りることになるからな。

シド ： あいつらのこと、必ず連れ戻してやろうぜ！

グ・ラハ・ティア ： ひとりだけ気味の悪い魔眼を持ってたせいで、ガキの頃は……まあ、ろくな思いをしなかったんだ。
だからこそ、アラグを調査して、眼の秘密を知ろうと思った。
秘密を知って、どうなるかはわからねー。ただ、クリスタルタワーの核心に迫るほど、
何かを思い出さなきゃならない気がするんだ……。